

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL.01092)

「新しい文明」の萌芽を探る
—日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる—

(政治・経済分野)

岩倉使節団 150 年を機に
「日本文明」の再興を考える
— 受容する文明から需要ある文明へ —

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2023年5月12日開催の第92回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る

－日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる－

岩倉使節団 150 年を機に 「日本文明」の再興を考える － 受容する文明から需要ある文明へ －

今から 150 年前、岩倉具視を大使とする総勢 100 名を超える日本人が、1 年半以上の長きにわたって欧米諸国巡遊の文明視察の旅に出た。岩倉使節団である。それから 150 年の歳月が経過し、その間、日本は急速な近代化を遂げたが、21 世紀に入って日本は明治維新にも匹敵するような国家と社会の再編成の時に直面している。日本は今、新たな岩倉使節団を必要としているのかもしれない。21 世紀の岩倉使節団に求められているもの、それは、日本の文化的遺産を受け継ぎながら、世界の変化を学び取り、それに適応した新たな文明のあり方を国際的に発信する知的冒険である。

瀧井 一博 (Kazuhiro TAKII)

1967 年福岡県生まれ。京都大学大学院法学研究科博士後期課程を単位取得のうえ退学。博士（法学）。神戸商科大学商経学部助教授、兵庫県立大学経営学部教授などを経て、現在、国際日本文化研究センター教授。専門は国制史、比較法史。

角川財団学芸賞、大佛次郎論壇賞（ともに 2004）、サントリー学芸賞（2010）、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞（2015）受賞。

主な著書に『伊藤博文』（中公新書）、『大久保利通』（新潮選書）、『増補版 文明史のなかの明治憲法』（ちくま学芸文庫）他多数。



目次

はじめに

－受容しながら文明を築いた 150 年間

I 岩倉使節団 150 年のイベント

- (1) 米欧亜回覧の会、明治神宮、国際日本文化研究センターでシンポジウム
- (2) 開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築
- (3) 一般に低調な記念のムード

II 岩倉使節団の見た文明

文明化は国家（主権国家）を築くこと

－憲法を作り、それを通じて国民と政府が一つになれるようなビジョンを描くこと

III 文明化の果てに

- (1) 野田宣雄が考えたこと
- (2) 文明衝突時代としてのグローバリズム：ハンチントンの罭
- (3) ハンチントンの罭を超えて：梅原猛とハンチントン

IV 21 世紀の岩倉使節団の課題

- (1) 受容する文明から需要ある文明へ
- (2) 新しい「日本」のかたち

質疑応答

2023年5月12日開催

第92回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：岩倉使節団150年を機に「日本文明」の再興を考える

－ 受容する文明から需要ある文明へ －

講演者：瀧井 一博（国際日本文化研究センター 教授）

(文中敬称略)

はじめに －受容しながら文明を築いた150年間

「ゲーテの会」にお招きいただくのは2回目であり、久しぶりにしかも一応コロナ禍が明けて、また美しい庭を見ながら話をする機会を与えていただけたことに感謝している。本日は、どれだけご期待に沿うことができるかわからないが、何とか責を果たすことができればと思っている。

本日は、岩倉使節団の話をしたと思っているが、先ほど会場に来て、皆さんと一緒にベートーヴェンの『レオノーレ』序曲第3番を拝聴し、岩倉使節団がボストンの地で聞いた曲だということを初めて知った。ボストンには2013年に1年間住んでいたことがあり、そのときにボストンのシンフォニーホールにも行ったが、そういう関心を持って行っていたわけではなかったので、不明を恥じているところである。

それ以前に日本人が西洋音楽を耳にしていたという話は、長崎の出島で聴いていたという説もあるが、何よりペリーが来日した際に、アメリカの軍楽隊が上陸してマーチを奏でている。それを聴いた一人の薩摩藩士が次のように記している。

「太鼓の打ちようトントントントントン大いに面白き打ち様也」。初めて聴く欧米の音楽に「何だ、これは」と驚き、それを一生懸命に記録に残そうとした役人がいたということとは興味が尽きない（細川周平「黒船のトントン太鼓」『図書』2020年9月号）。

このように、岩倉使節団をはじめとして西洋文明を学習してきた日本は、欧米の文明に対して何から何まで「何だ、これは」と驚きながら、しかし一生懸命にそれを利用しようとしてきた。そういう150年を我々は歩んできたのだと思う。



【写真1】岩倉使節団（大使と副使4名）
Public domain, via Wikimedia Commons

【写真1】は、岩倉使節団の一行が太平洋を横断してサンフランシスコに着いた際、大使と副使の計5名が記念撮影をした有名な写真である。印象的なのは、中央に

いる大使の岩倉具視がまだ和服を着ていて、他の副使の人たち、一番左が木戸孝允、その隣が山口尚芳、右から2人目が伊藤博文、一番右が大久保利通だが、彼らはすでに洋服を着ているという点である。これは出発するときに、岩倉具視以外は洋服を着るが、大使である岩倉は大和魂を示すために和服で通すということを申し合わせていたものだが、足元を見ていただくと、岩倉も靴を履いている。こうしたところに、すでにやや妥協しているようなところが見えるが、実際に旅が進んでアメリカを横断する中で、いつしか岩倉も断髪して洋服を着るようになり、変節していく。

このように和服から洋服に転換することも、当時の人たちには大変なことだった。当時はまだファスナーというものがなかったので、下品な話になって恐縮だが、ズボンの前はファスナーではなくボタンを留めていた。しかし、ボタンを留める、外すという行為は当時の日本人には初めての身体的な行動であり、慣れないために、トイレに行ってもなかなかボタンを外せず、仕方なくボタンを引きちぎって用を足したというような話も伝わっている。

そのようにして我々の150年というものがあつたと考えれば、それは、我々が言わば外から受容しながら文明を築いていくという、そういうことを続けてきた150年であつたと言える。

1 岩倉使節団150年のイベント

(1) 米欧亜回覧の会、明治神宮、国際日本文化研究センターでシンポジウム

岩倉使節団は1871年に横浜を出発し、1873年に日本に戻ってきた。したがって、2021年からの3年間は岩倉使節団150年にあたる記念の年だったわけである。そこで、これを記念するイベントもいくつか行われた。例えば、東京で長く岩倉使節団を勉強している「米欧亜回覧の会」というNPO法人があるが、これは実際に岩倉使節団に参加した方々の子孫も多く加わっている大変に充実した団体である。また、明治神宮でも、昨年シンポジウムが開催された。

今年に入ってから、私の勤め先である国際日本文化研究センターで「日本文明の再構築



【写真2】国際シンポジウム「日本文明の再構築—岩倉使節団150周年に寄せて—」於：日文研 2023年2月17日-19日
<https://www.nichibun.ac.jp/ia/research/kikan/2023/02/17/>

—岩倉使節団150周年に寄せて—」というタイトルで国際シンポジウムを開催した。聞くところによると、高等研でも、日本文明をテーマにしてこれからいろいろと催しをされるようである。偶然の一致だが、我々も「日本文明とは一体何なのか」ということを、これを機に考え直してみようという趣旨で、シンポジウムを開いた次第である。【写真2】

右がそのポスターで、記載されたプログラムに従って3日間開催された。【写真3】



【写真3】国際シンポジウム「日本文明の再構築—岩倉使節団150周年に寄せて—」チラシ

(2) 開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築

また、国際日本文化研究センター（日文研）が所属している人間文化研究機構で、現在「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」というプロジェクトを行っている。人文学が内側で閉じこもるのではなく、社会のいろいろな機関、ステークホルダーと共に創っていくプロジェクトを考えようという趣旨で、この一環として「岩倉使節団についての様々なエピソードをマンガにしたらおもしろいのではないか」と思い、京都精華大学、京都国際マンガミュージアムのマンガの専門家の人たちと一緒に、今、岩倉使節団のマンガを制作している。【図1】



【図1】 ©2023 International Research Center for Japanese Studies, illustrated by Sakino Hamada

昨年からはじめて、主だったキャラクターのイメージを作ったところだが、現在、具体的にマンガを作ってもらっている。これが完成したら、小学校、中学校、あるいは高校の歴史の教材として使用してもらいたいというビジョンを抱いている。ちなみにこのマンガには1人だけ女の子がいる。ご存じの方も多いと思うが、津田梅子である。このとき若干まだ7歳だった。明治政府は、これからは女子教育も充実させなければならないと考え、女の子たちを5人ほど岩倉使節団に留学生として参加させた。彼女たちはアメリカに残り、長い年月をかけてアメリカの地で教育を受けた。津田梅子は10年以上アメリカで教育を受けた後、日本に戻って、現在の津田塾大学を創設することになる。そういう部分もぜひ取り入れて、ストーリーを作ってい

きたいと思っている。

(3) 一般に低調な記念のムード

このように、岩倉使節団 150 年のイベントに私自身も関わってきたが、実は一般的には全く盛り上がっていない。これはなぜなのか。私の職場の同僚にテレビで活躍されている磯田道史氏がいるので、磯田氏に「テレビで岩倉使節団のことを放映しているか」と尋ねたところ、「していない」と言われた。マスコミでも取り上げられていないのである。この中でも岩倉使節団 150 年を知っていた方はほとんどおられないのではないかと思う。それくらい低調である。

その理由として、一つにはやり尽くされたという部分があるのではないかと思う。これまで非常に大きな研究の盛り上がりがあったので、その辺りで「研究としてはすでにやり尽くされた」というムードが学界にはあるのではないかと思われる。ただその一方で、今も新しい資料が発見されているので、これからまたおもしろい事実や研究課題が出てくる可能性は十分にある。

さらに、やり尽くされたという理由ともつながるが、第一人者がいなくなってしまったことも盛り上がらない一因と考えられる。岩倉使節団に関して大変に充実した研究をされていた北海道大学の田中彰先生も、かなり前に亡くなられた。また私の研究所の名誉教授でもある芳賀徹先生は、比較文学や美術史の大家なので、そういう観点から岩倉使節団の人たちが残した文章を「日本人が残した非常に優れた文学」「一級品の文学と言っていい」と評価し、岩倉使節団研究をそういう立場から切り開かれた。この芳賀徹先生もコロナ禍の直前の 2020 年 2 月に亡くなられた。このように研究を牽引する方もいなくなったし、研究自体も岩倉使節団については「やり尽くされた」という意識があるような気がする。

それに加えて、より根の深い問題があるように思う。それは明治という時代が遠くなってしまったということである。これは単に時間的に遠いというよりも、心理的に疎遠になったのではないかと思う。実は、岩倉使節団 150 年の以前に明治 150 年があった。2018 年が明治維新 150 年に当たっていたわけであり、ご記憶の方もおられると思う。これに関しては、最初、当時の安倍首相が大変に意気込んで「明治 150 年の行事を行う」という指示を政府に出していた。私も若干お手伝いをした。しかし、それにも関わらず、安倍内閣が国の内外でいろいろな問題に直面して大忙しだったこともあるかもしれないが、記念行事は尻すぼみになった部分があるように思う。

ただ、それ以上に一般の国民の中で、明治という時代に対する意識が大きく変容しているのではないかという思いがある。中でも 1990 年代からの「失われた時代」と言われる社会意識が広がっていったことが大きいと思う。そのため、今の日本人にいくら「明治の人たちは偉かった」「明治の日本人は凄かった」と過去の栄光を振りかざしても、白々しさや幻滅感をもって捉えられてしまう、そういう風潮があるのではないかという気がしている。

そういうことを踏まえながら、果たして今の時代に岩倉使節団を考えることの意義は何か、私なりに考えたことを話したいと思う。



【写真4】明治100年記念式典、1968年10月23日 於：日本武道館（『明治百年記念行事等記録』総理府大臣官房，1969）



【写真5】明治150年記念式典、2018年10月23日 於：憲政記念館（首相官邸HP）

上の2枚の写真は、先に説明した行事をビジュアル化した資料である。

【写真4】が「明治100年記念式典」で、私もまだ赤ん坊だったので覚えていない。このときは佐藤栄作首相が大変な意気込みで取り組まれており、国民的に大きなイベントがいろいろと開催されたようである。日本武道館に天皇皇后両陛下をお招きし、1万人ほどの人が集まって記念式典が行われた。「天皇に万歳をさせた」ということの是非は問われるかもしれないが、それくらい大掛かりな式典だったわけである。

一方、【写真5】の「明治150年記念式典」は2018年10月23日に行われたが、武道館ではなく、憲政記念館でこじんまりと行われた。「明治100年記念式典」当時のことを知る方がここにも参列して、「寂しかった」という感想を漏らされていた。

II 岩倉使節団の見た文明

このように明治や岩倉使節団について次第に語られなくなっていく、疎遠になっていく原因を考えるために、まず岩倉使節団がどのようなことを見てきたのかということを紹介したいと思う。

もちろん彼らが見てきたことはバラエティに富んでいるが、その旅には「西洋文明に追いつくためにはどうすればいいか」ということを考える一つの大きな柱があったと思う。それを象徴的に記した文章を紹介したい。

これは岩倉使節団の書記官として参加した久米邦武という有名な歴史学者が残した『米欧回覧実記』という使節団の旅行記である。岩波文庫から全5巻で復刻されている。明治の擬古文で書かれているので読みにくいですが、しかし一度読んでみると、意外とリズムがあるのでなかなかおもしろく読めると思う。

白種ハ情欲ノ念熾シ、宗教ニ熱中シ、自ラ抑制スル力乏シ、略言スレハ欲深キ人種ナリ、黄種ハ情欲ノ念薄ク、性情ヲ矯揉スルニ強シ、略言スレハ、欲少キ人種ナリ、故ニ政治ノ主意モ相反シ、西洋ニハ保護ノ政治ヲナシ、東洋ハ道德ノ政治ヲナス。

「白種＝白人、欧米人は情欲の念が盛んで、宗教に熱中し、自らを抑える自制心が乏しい。略言すれば欲深き人種である」と説明し、それに対して「黄種＝黄色人種、東アジアの人たちは情欲の念が薄く、性情は柔らかい。略言すれば欲少なき人種である」と対照させている。そして「故に政治の主意も相反している。西洋には保護の政治をなし、東洋は道德の政治をなす」と言っている。

商事ハ、太平ノ戦争ニテ、亦天時モ恃ニ足ラス、地利モ頼ムニ足ラス、惟人ノ心協和力ニアリ

では「保護の政治」とは何なのかということに注意して、もう少し読んでみると、「貿易等の経済活動は太平の戦争であって、天が与えてくれたチャンスというだけでは頼りにならない。地の利も頼むに足らない。重要なのはただ人の心であり、どれだけ人々が一致団結して太平の戦争に向かうことができるかということである」と言っている。

自主ノ権利ハ、人人ニ之アリ、而テ人ハ利益競争ノ中ニ住居スルモノナリ、…… 只其能保護ヲ全クスルノ道ハ、其利益ノ競争ニツキテ、合体協同ノ社会ヲナサシムルニアリ。

(以上：久米邦武『米欧回覧実記』より、

瀧井一博『増補版 文明史のなかの明治憲法』ちくま学芸文庫、2023年、68頁以下)

そして、「欧米においては人々が自立心に富んでおり、人々は自分たちの利益の競争の中に住んでいる。」「利益を保護し、それを完全なものとする道は、利益の競争の中で人々が合体し、力を合わせて協同した社会をつくることである。そうすることによって、利益を同じくする人々が集まり、他の国人と太平の戦争を戦う。それが西洋の社会の仕組みだ」と言っている。つまり、利益を保護する政治が西洋であって、東洋が今まで行ってきた道德を中心とした政治とは全く異なるということ、久米邦武は欧米を実際に見た後に書き記している。

大なり小なり使節一行はこのような思いを感じ取ることになる。彼らは「これまでの儒教道德に基づいた政治から、国力を発展させる、そして熾烈な国際競争を戦い抜く政治に変わっていかなければならない。国益の競争を勝ち抜くためには国民が一丸となり、そして国家が国民の利益を保護するような政治というものを作っていかなければならない」という思いを抱えていたのである。そのような思いから、日本は 150 年間にわたって国というものを創り上げてきたとも言える。

つまり、日本にとって文明化は国家を築くことであり、その国家とは国民国家、人々が一致団結できる国家、一丸となって力を蓄えて外に対して力を発展させていく、そういう意味で主権国家である。もう一つ付け加えるならば、そのために憲法を作り、それを通じて国民と政府が一つになれるようなビジョンを描いたのである。そうすることによって、西洋文明に追いつこうとした。それは明治以来の国家的な目標であったと言えると思う。そのようなことを、私は『文明史のなかの明治憲法』という本の中で論じており、ちくま学芸文庫から増補版(2023年)が出ている。【写真6】



【写真6】瀧井一博 著『文明史のなかの明治憲法』(ちくま学芸文庫)

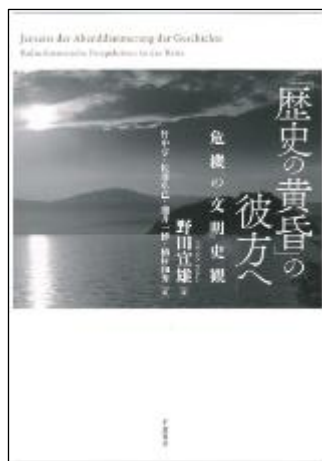
III 文明化の果てに

(1) 野田宣雄が考えたこと

そのようにして日本は新しい文明を受容し、国民一丸となって文明国になり、西洋文明をキャッチアップしようとした。司馬遼太郎風に言うならば「坂の上の雲を掴もうと一生懸命に坂を駆け上がってきた」わけである。それが日本の近代の歩みであったと言えるが、言ってみれば、そのようなキャッチアップは、戦後すでに我々は果たしたと言ってもいい。客観的に見て、西洋文明に追いついたと言えるだろうと思う。



【写真7】野田宣雄 (1933-2020)



【写真8】野田宣雄著(竹中亨・佐藤卓己・瀧井一博・植村和秀編『「歴史の黄昏」の彼方へ：危機の文明史観』(千倉書房、2021年)

問題は、その後何があるかということである。私の恩師の一人で、私が京都大学で教えを受けた野田宣雄先生が2020年に亡くなられたが、その後、野田先生の教えを受けた門弟たちで野田先生の遺稿集を編纂した。それで野田先生が書き残したものを改めて読んだときに、この点について改めて深く感じるがあった。【写真7、8】

私は1990年代から野田先生を囲む研究会に参加していたが、そのときから野田先生は「日本はこれから危ない」としきりに言われていた。冷戦後、グローバリズムがますます加速化していったときに、その中で果たして日本が自分を保っていけるかどうかは非常に危ういと言われていたのである。当時は、まだ私も大学院生であり実感もなく、「そんなのか」という程度の感想をもってその話を聴いていたが、今になってその言葉が突き刺さってくる。

野田先生は1990年代半ば頃に書かれた文章で、すでに以下のように言われている。

日本人は、民族的・文化的な同質性の高い国民国家の形成にあまりにも見事に成功を取めたために、グローバル化の時代にあっては、内向きの閉鎖的な社会を形成して適応力を失ってゆく恐れがある。そして、「宗教の代用物」としての国民国家の正当性が低下してゆけば、下位のエスニーの受け皿が用意されていないだけに、日本人がアイデンティティの危機に陥る危険性も高い。

(野田宣雄「国民国家から帝国へ」
同著『「歴史の黄昏」の彼方へ：危機の文明史観』、313頁)

ここで言われているのは、明治以降、日本人はあまりにも見事に国民国家というものを創り上げてしまったので、言わば日本人には「日本人か」「日本人ではないか」という単純な二者択一しかないということである。つまり、日本人を構成している下位のエスニーというものがいない。エスニーというのは種族、例えば「日本人」よりも「九州人」とか「関西人」「大阪人」等、それとは全く別アイデンティティを持った集団という意味だが、そういうものが日本では希薄であり、「国民か」「国民ではないか」という二者択一しかないと言われているのである。

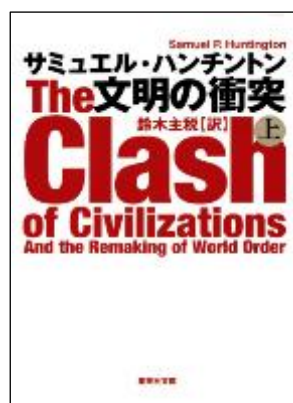
それに対して欧米ほどの国を見ても、例えば、イギリスではスコットランドが独立しようとしているとか、ドイツにはバイエルンがあったり、プロイセンがあったり、またオーストリアはドイツの一部ではないか等、非常に重層的なアイデンティティがある。しかし、日本人の場合、アイデンティティと言えば「日本国民か、そうではないか」というものしかなくて、野田先生によれば、これからグローバリズムが浸透して、そういう国民国家の有効性が揺らいでくると、日本人も「さらなる受け皿は何か」ということを問われるようになると盛んに言われていた。それを今になって思い返している。

(2) 文明衝突時代としてのグローバリズム：ハンチントンの罨

そのような野田先生の危機感を煽ったのが、サミュエル・ハンチントンというハーバード大学の政治学の教授が書いた『文明の衝突』【写真 9】という本だった。当時、ベストセラーになったが、その中でハンチントンは「これからのグローバリズムの時代は、文明の衝突の時代になる」と言っている。そして「世界は八つの文明に分類される」として、中華文明、ヒンドゥー文明、イスラム文明、西欧文明、ロシア正教会文明、ラテンアメリカ文明、アフリカ文明、そして日本文明を挙げている。

ここでハンチントンは、日本文明に対して「一つの独立した文明」と言っている。当時、ある著名な評論家が「ハンチントンは日本のことをよく分かっている。日本は文明として独立したものである」と、日本が褒められたと勘違いしていたが、実はハンチントンが言ったのはそういうことではない。日本文明は独特なので、一つの文明圏として数えられるのだけれども、しかし非常に孤立した将来性のない文明であると言っているのである。

「最も重要な孤立国は、日本である。日本の特殊な文化を共有する国はない。日本の孤立の度がさらに高まるのは、日本文化は高度に排他的で、広く支持される可能性のある宗教やイデオロギーをとまなわれないという事実からであり、そのような宗教のイデオロギーをもたないために、他の社会にそれを伝えてその社会の人々と文化的な関係を築くことができない」として、これからグローバリズムが進展して他の文明との接触、それからくる衝突が高まってくる時代の中で、日本文明はその潮流にアジャストできずに埋没していく危険性が高いということを、ハンチントンは述べているわけである。そのようなハンチントンの議論が、野田先生の考えの根底にもあった。



【写真9】 サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』
 原著 *The clash of civilizations and the remaking of world order* は1996年刊もとなった論文 *The Clash of Civilizations?* の題で、*Foreign Affairs*, Vol.72, No. 3, 1993 に掲載

(3) ハンチントンの罫を超えて：梅原猛とハンチントン

日本社会の課題は、このようなハンチントン罫をいかに乗り越えるかということだと思う。

私が勤務する国際日本文化研究センターの初代所長である梅原猛先生は、1999年に東京新聞の催しでハンチントンが招聘された際、ハンチントンと対談している。このときは日本に招待されたということで、ハンチントンも日本が文明衝突時代にどのようにして生き延びていくかということを経営的に議論してくれたが、この梅原先生とハンチントンとの対談の中で言われていたのは、「日本は孤独な国だ」「日本文明を構成するのは日本という国しかない」「他の文明はいくつかの国によって構成されているけれども、日本文明と日本国家はイコールであってそれ以外にはない。仲間がない」ということである。

梅原先生もそれについては認めながら、「それが故に、日本は積極的に人類に向かって何ができるかということを考えなければならない」と言われ、「日本の近代文明は、今、危機に陥っている。それを克服する新しい自然観を日本は提示できる」と述べられた。それに対してハンチントンは「それはそうかもしれないが、その前にこの少子化をどうにかしなければ、日本は本当に危ない」と切って返している。



【写真10】 東京新聞 1999年9月19日

また、「日本というのは様々な文明を知っている。西洋も東洋も知っている。その立場を利用して文明同士の仲立ちをしていくべきである」と述べて、新聞記事にも「発信型文明をめざすべきである」と書かれている。

IV 21世紀の岩倉使節団の課題

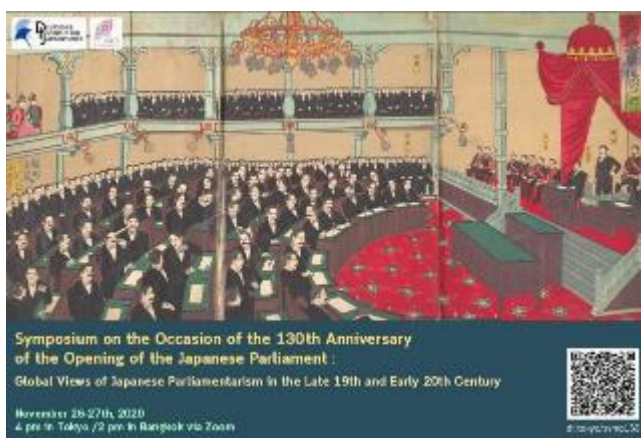
(1) 受容する文明から需要ある文明へ

こう考えていくと、「発信型文明」が今後の課題になってくるものと思われる。今までの日本は、古代から長らく外の文明を受容する社会だった。それに対して、今我々は西洋文明へのキャッチアップを遂げ、次に目標とする外の文明を持たない、そういう時代に入っているように思う。

さらに、国際社会を見ると、イスラム圏やプーチンのロシアが「自らのアイデンティティ」を誇示している。また、ヨーロッパやアメリカも今、移民問題が深刻化して外国人を排斥する過激な右翼の運動が強くなっている。そこには、それぞれの文明圏が一つの政治的、経済的なブロックとして閉じ籠ろうとしているような、そういう気配がひしひしと感じられる。そういう中で日本はどのように立ち回ればいいのかということを考えなければならない。それが文明的な課題だと言えらると思う。

それを標語として考えたときに、私はこれまで一生懸命に外から受容してきた文明から、外に対して需要のある文明を模索しなければならないのではないかと思っている。しかし、「では、それはどういう文明なのか」「果たして日本の役割はあるのか」ということに対して明確な答えはない。したがって、是非、高等研の方でも「何ができるか」ということを考えていただけると有難い。

ただ、このコロナ禍の中で、一つだけ勇気づけられることがあった。2020年に日本の議会制130周年を考える国際シンポジウムがウェビナーで開催されたのである。【写真11】日本の議会制130周年は全く話題にならなかったと思うし、学界でそういうことを考える企画やイベントがあったようにも聞いていないが、海外から「日本の議会制130周年を考える国際会議を開きたい」という話が出てきたのである。このシンポジウムに私は、キーノートスピーカーとして招かれた。



【写真11】日本の議会制130周年を考える国際シンポジウム
<https://www.dijtokyo.org/ja/event/symposium-on-the-occasion-of-the-130th-anniversary-of-the-opening-of-the-japanese-parliament-global-views-of-japanese-parliamentarism-in-the-late-19th-and-early-20th-centuries/>

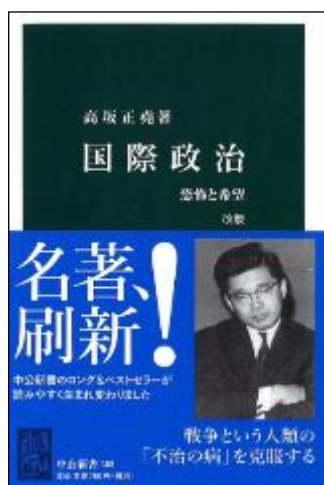
主催はドイツの研究機関とタイのチュラロンコン大学で、蓋を開けてみれば、ドイツ、タイ、中国、フィリピン、インド、ポーランド、エチオピアなど多国籍の研究者が集っていた。しかも興味深かったのは、ほとんどの方が日本のことを専門に研究している日本研究者ではなかったことである。議会政治や政治思想や政治学の立場から、日本の議会制度が130年も続いたという事実非常に大きな関心を持った人たちが集まったのである。

そのときに印象的だったのは、あるエチオピアの研究者から発せられた「なぜ日本はもっ

と自分の経験を世界に向けて伝えないのか」という言葉だった。その言葉に私は目の覚める思いがした。考えてみれば、日本は議会制度を曲りなりに130年間維持してきた。外からの制度を導入して、それを根付かせてきた。もちろんそこには紆余曲折があったし、昭和に入ってから政党政治が機能不全を起し、今のような泥仕合を演じ続けて、その結果、国民からはそっぽを向かれて軍国主義の台頭を許し、破綻したが、戦後にもう一度仕切り直して議会政治に立ち返る。そして、今がある。そこには議会制度というものについての光と影が集約されているとも言える。

そういう意味で、それは人類の遺産と言ってもいいかもしれない。そこには、これから議会制度を持とうとしている国や、議会制度が上手く機能しない国々に対して、日本が何かを伝える意義があるし、またその資格もあるし、責務があるとも言えるのではないか。そういうことを、このときに考えたわけである。

(2) 新しい「日本」のかたち



【写真12】写真高坂正堯著『国際政治—恐怖と希望』（中公新書、2017年）

もしも21世紀に、岩倉使節団というものがもう一度行われるならば、それはどういうものであるかと考えると、まず時代状況が全く違うことに目を向けなければならない。今はキャッチアップを成し遂げた状態、言わば坂の上の雲をつかんだ後であり、そしてその上で「新しい国のかたち」を考えなければならない。そのための旅を我々はこれからもしなければならないのではないかとということである。

同じように私が大学生のときに講義を受けた京都大学の高坂正堯先生は、「国家というのは三つの体系がある」という有名な論を述べられている。【写真12】三つの体系とは、一つは「力の体系」、二つ目が「利益の体系」、そして三つ目に「価値の体系」を挙げて、同じ価値観を共有した人たちの共同体であると言われているが、今、この「価値の体系」についてもっと考え直さなければならないのではないか。言わば日本は「力の体系」や「利益の体系」としての国家は十分に築いてきたが、今後の課題としての「価値の体系」は、単に内向きの価値の提示になってはならないということである。これからくる時代について、文明衝突の時代という形式化が正しいかどうかは分からないが、少なくとも文明というものが多極化していく時代の中で、そうした世界に日本が何を貢献できるのかということを探求し、そのための価値や知識を発信していく、そのような装置として国家というものを改めて考えなければならないのではないかと考える。

その場合に、今後、我々が語らなければならない文明というものは、自国を誇示することではなく、他者に何を寄与できるかということ、そういう観点から自分たちが持っているものを掘り起こし、創り出して、広めていくことではないかと思う。

そういう意味で、21世紀の岩倉使節団というものは、文明を受容してきた今までの歩みから、需要＝ニーズのある文明への転換を遂げる、そのことをグローバルに考えるために、もう一度世界中を見て回る必要があるのではないかと思われる。

それは、逆説的ではあるが、私自身の中では明治維新の理念に立ち返っている部分もある。明治維新というものは藩を潰した。それまで日本人にとって国と言えば藩だった。日本というものは意識されてはいたけれども、ほとんどの人が「日本が帰属する国家だ」とは思っていなかったのである。しかし、その中で故国としての藩を潰し、新しい国としての日本というものをつくり、国民国家をつくった。それが明治維新だった。

それを象徴的に表している言葉として最後に紹介したいのが、岩倉使節団の副使でもあった木戸孝允が慶應元年に書いた手紙である。

弟〔木戸〕長の人にあらず。日本の人にあらず。天に登りて今日 皇国を見るとき、
実に天も未 皇国を御見捨は無之事に而、今日之場合に至り候も自ら 皇国之病ぶん
り仕候に可有之歟。天下に名医有之候て於于此天下安静永久之基本も相立 皇国富国
強兵の策も今日より被相施、天下共に安楽の場合にも可立至と奉存候得共、天にも名医
之御人選までは無之事に付、拙医之為 皇国之病を治し候事出来不申却而病之起発す
所以を不察病勢を助け候様に相成候歟も難計是も亦天と申議にも可有之歟存不申候
得共、随分遺憾之次第に御座候。長州も大と小との異なるのみにし而今日之場合に至り
候も元より偶然には無之。 皇国之今日に至り候も同一徹と存申候。長州今日之場合に
立至りを名医よりしてうかぢわせ候は、千載一時之機会にも可有之歟。左候て今日之
長州も 皇国之病を治し候にはよき道具と存申候。

(慶應元年(1865)7月18日付 対馬藩士大島友之允宛 木戸孝允書簡)

木戸は手紙の中で、「弟」＝自分は長州の人間ではないし、日本の人間でもないと言っている。では何かというと、目の前に実際にある国としての長州や日本というものを超えて、自分は「皇国」の人間であると位置づけている。「皇国」とは天皇中心の国家ということで、国粹主義的なニュアンスがあるかもしれないが、このとき木戸が意識していたのは、決して日本を第二次世界大戦に導いた皇国思想というものではなく、まだ見ぬ国、全く新しい国家というものとして、「皇国」というスローガンを使っている。その中に長州も日本というものも入らなければならない。そういう大義に基づいた「皇国」というものをつくるのが、ここで木戸が意識していたことだと思われる。

その長州も日本も、そして「皇国」も、今は病に苦しんでいる。その中で最後に、自分の国である長州は「皇国」という新しい国家をつくる道具であると言い切っている。私はここに明治維新の初発の理念が表わされていると思う。そのような理念に立ち返るならば、我々は、今度は日本というものも一つの道具として、それを使って世界に何ができるかを考えな

ければならない。また、日本自体に苦しんでいる部分があるならば、特に様々な地域が疲弊し、消滅しようとしていること、またハンチントンにも言われた少子高齢化という問題など、そういうものを解決するために日本はどのようなことができるのか、そのための道具として日本を考えていく。そのようなことが、今後の日本文明というものを考えるときの課題にもなるのではないかと考えている。

質疑応答

- Q1 「需要ある文明」について、考えられる「需要」とは何か
- Q2 明治維新の負の側面の清算から、発信できるニーズが見えてくるのではないか
- Q3 日本人のあり方について、どう考えられているか
- Q4 岩倉使節団が持ち帰り、日本で育んだものを、日本人はなぜ発信できないのか
- Q5 排他的な宗教やイデオロギーを持たない日本は何を主眼として発信するのか
- Q6 岩倉使節団は、欧米で視察すべきポイントが事前に分かっていたのか
- Q7 「国制知」についてどのような見通しをもっているのか
- Q8 100年後も残るのはどのような文明か、1000年後も残る世界文明はあり得るのか
- Q9 万博で「けいはんな」から新たな地上資源文明が発信できないか

Q1 「需要ある文明」について、考えられる「需要」とは何か

「受容する文明から需要ある文明へ」ということで、「受容する文明」とは迎合するのではなく、受け入れて、自ら消化して、自分のものとして発展させていくものだと思うが、「需要ある文明」をニーズある文明とすると、ニーズとシーズのマッチングなど、狭い意味で、ニーズがあってマッチングするシーズがなければそのシーズを技術開発するという文明のように感じてしまうが、どのようなニーズが考えられるのか、ヒントをいただければと思う。

(瀧井)

本質的なところを突かれたように思う。日本にどのような需要があるのかということだが、私は、実はそういうものはないのではないかという気がしており、自信を喪失していた。しかし、今の職場にいて、日本のことを日本人顔負けで研究している人が世界中にたくさんいたり、最近、国際会議等に声を掛けられることが多かったり、人文学の世界でも日本に対する関心があることを実感する機会があった。

その一例が講演の中で紹介した「日本の議会制 130 周年を考える国際シンポジウム」であり、日本の議会制に世界史的な価値があるということを実感した。日本のことを専門に研究していない人たちが、あれほど多く集まり、日本の議会制を知りたいということで盛んに議論し、意見を聞いてくれる。そして「なぜ日本はこれほど貴重な経験をしているのに、それを世界に向けて伝えないのか」と言われたわけである。

私の経験はそうように限られたものではあるが、今後、もし岩倉使節団がもう一度派遣されるのであれば、それは単に他の国の文明を学び取るだけではなく、日本に何ができるかということを学習して回るような旅でなければならないと思う。

このように、私にはまだ「日本はこれができる」という明確な解答がないし、むしろ「何もできない」と思っていたが、意外と「日本のことを知りたい」という声が世界にはあることを知った。科学技術等に関してはそういう声は多いと思うが、人文学や歴史学でもそうい

う声があることを知ったわけである。

それから、最近もう一つ思ったことがある。リンダ・コリーというプリンストン大学の大変有名な歴史学の先生が、専門はイギリス史だが、憲法を他の国々がどう受け入れて作ってきたかということについて分厚い本を出版された。そして、その最後の章が日本の明治憲法になっている。それは、彼女が「明治憲法は、憲法の歴史の中でブレイクスルーである」と考えているためである。ヨーロッパ以外の他の国々は、憲法を作っても失敗してきた。それまで日本以外に憲法を持った国はごく限られており、ラテンアメリカは植民地の遺産として持っていたが、それによって政治が安定したとは言えない。また、オスマントルコが1876年に憲法を持つけれども、1年で停止している。そういう中で、日本は憲法を作っただけでなく、定着させ、それを通じて国力を発展させた。そのことは、憲法がどれだけ国家にとって重要なファクターであるかということを知りしめるきっかけになった。それで、リンダ・コリー先生は「明治憲法は世界史にとってのブレイクスルーである」と書かれたわけである。

その議論の大枠は、私にとって非常に啓発的だった。日本史に対するそういう世界史的な関心はあり得るということなので、日本史を世界史の枠組み中で捉えるためにも、やはり日本の正確な知識として、これからは人文学もしっかりと英語で発信していかなければならないと感じた次第である。

Q2 明治維新の負の側面の清算から、発信できるニーズが見えてくるのではないか

私は、講演の中で紹介された野田宣雄先生とかつて同僚だったが、今は平安女学院大学で教えている。

最初にベートーヴェンの『レオノーレ』序曲が流れたが、これを聴いた岩倉使節団にとっては驚天動地の出来事だったと思う。それから50年ほど経って第一次大戦が起き、この大戦で捕虜となって徳島県の鳴門の板東俘虜収容所に収容されたドイツ人たちが、森の木を切ってバイオリンを作り、ベートーヴェンの『交響曲第9番』（第九）を日本で初演する。100年ほど前のことである。100年ほど前まで、日本人はベートーヴェンの第九を聴いたことがなかったわけである。

それから100年間で、私たちはいろいろな西洋音楽を学んだ。そして、150年間で日本人の暮らしは大きく変わった。和服が洋服になった。下駄や草履が靴になった。和食がステーキになった。日本茶がコーヒーや紅茶になった。このようにガラリと変わった。だから、私は中学か高校の授業で「明治維新は革命ではない」と習ったが、実はそうではなくて、フランス革命以上の大変化だったのではないか、明治維新はやはり革命と言うべきではないかとかねてから思っている。仮に、革命であるとする、その革命の方針を決めなければならない。その方針を決める上で、岩倉使節団が大きな役割を果たした。これはとても高く評価しなければならないし、解明するべきことがまだまだあると思う。

しかし、革命には必ず負の側面がある。フランス革命は恐怖政治を沸き起こした。明治維

新も、それが革命だとすると必ず負の側面がある。その一つが第二次大戦であり、馬鹿なことをしたと思う。バブル経済も馬鹿なことであり、バブル経済の後の失われた10年とか20年、30年というのも恐らく明治維新という革命の負の遺産だったのではないか。私は、フランスという国はフランス革命の負の遺産をいまだに処理し切れていないと思っている。いまだに何かというとすぐに政府に反対して、デモをすれば事が収まると思っている。それはフランス革命の負の遺産だと思う。同様に、日本は、令和になっても明治維新という革命の負の遺産をまだ処理し切れていないのではないか。

したがって、瀧井先生が言われたように、私たちは明治という時代を総決算しなければならない。明治どころか昭和前期にどうして太平洋戦争に突入してしまったのか、その歴史を総決算しなければならない。戦後日本を総決算しなければならない。それから身近なところで言うと、京都は明治以降大きく変わったが、そういう近代京都の総決算もなされていない。そのようにすべきことがたくさんある。私は歴史家ではないが、歴史家に課せられた課題は大変大きいと思っている。

先ほど、今の日本に提供し得るニーズがあるかというご質問があったが、私は日本が非キリスト教国であることが最大の利点だと思っている。キリスト教は非常に変わった宗教であり、かつてヨーロッパには、キリスト教のような宗教ではない、農耕儀礼に近いような土着の信仰がたくさんあった。それが古代ゲルマン信仰やケルト信仰と言われるものである。日本の農耕儀礼、祭り、節分祭やなまはげなどの行事と大変よく似ている。そして、欧米においてキリスト教の力が衰えてきた今、非キリスト教的なもの、ヨーロッパにあった土着のものの再発見が大きな意味を持っていると思っている。ヨーロッパ人は日本に来ると「ヨーロッパがはるか昔に捨て去ってしまったものがたくさん残っているので、それに啓発される場所が大きい」と言っている。

そのように、日本の良さは非キリスト教文明、非キリスト教文化を持っていることにあるので、それが一番の売りになるのではないかと考えている。

(瀧井)

非常に啓発に富んだコメントで、私は知らないところが多かった。私の方からは何も答えることはないが、私も明治維新は「restoration＝復古」と訳されるよりも「revolution」という完全に新しいものだと思っている。京都大学で人文科学研究所を率いていた桑原武夫先生が、フランスに留学されたときにそのことを実感したそうである。「フランス革命というけれども、フランスはまだ貴族がいる。それに比べて明治維新の方が徹底的に身分制を壊した。よほど明治維新の方が徹底した革命だ」と言われて、そこからフランス革命と明治維新の比較研究をされたと聞いている。

ご質問のあった方が言われた明治維新の負の側面の清算と同じことだと思うが、私の捉え方からすると、明治維新はあまりにも見事に中央集権化され、国民を動員する体制を作り上げてしまった。それが今、それとは全く違った国際関係の中で足枷になって、日本のいろいろな政治のあり方など、そういうものが柔軟性を欠いてしまっているのではないかと思

う。

そのため、私は個人的には、幕藩体制に戻すべきだと思っている。藩は素晴らしい仕組みだったのではないか。藩によって日本がいくつも区切られていて、藩主次第ではあったかもしれないが、英明な藩主の下では産業が興り、学問が興り、人々を呼び込み、それらが競争し合うということが日本の社会にあったわけである。私は、藩とは企業であり、藩主はアントレプレナーだと考えており、そういうものが競い合うようにいくつもあったがゆえに、それが明治維新の土壌になったのではないかと思っている。そして、その藩の遺産を中央政府に吸収して国民国家をつくったので、今度はこれを地域に返していくようにして、もう一度藩を再建するべきではないかと、そういうことを勝手に考えている。

Q3 日本人のあり方について、どう考えられているか

今の日本人は捨てたものではなくて、例えば、野球のワールドカップ（WBC）のとき、大谷翔平選手が試合前に「大リーガーにあこがれるのはやめよう」と言い、そして勝った。そのように日本人は緩やかに、柔軟に、柔らの姿勢で、徐々に人を組み込んでいくような力があるように思う。縄文時代から弥生時代に至り、そこから平安時代、室町時代、戦国時代などへつながっていくが、その度に何かを吸収していく。漢字も吸収していくし、昔あったとされる神代文字も吸収し、英語もオランダ語も吸収していく。宗教自体も仏教と神道を融合させた。それを瓦解させたのが明治政府で、廃仏毀釈を行った。壊さなければ新しいものはできないので、時代ごとに強かに、柔らの姿勢で、そして大和魂をもってやってきたのが日本人ではないかと思う。したがって、今の宗教観やキリスト教の問題やいろいろなこともすべて含め、漢字もカタカナも英語等の横文字もあるような文化というのは、そこにあるだけで世界の人たちが注目するのではないか。

ただ、発信力がない。それを一サポーターたちが、ロッカーを掃除してみたり、球場を掃除してみたり、あるいはイタリアで日本人が住み始めたら一気に街が綺麗になったが、日本人がいなくなったら一気に汚くなった等、そういう実績を重ねている。そういう日本人魂というものをもって日本の人たちが一生懸命にやっていくので、日本人は意外と捨てたものではないと思っている。

そこで日本人のあり方について、どのようにお考えなのか、先生のご意見を伺いたい。もっと発信すべきなのかとも思うが、上手に発信しないと“出る杭は打たれる”という日本人の考え方もある。それは長年培った日本人の中の共有文化として、「日本人だから仕方がない。しかし、日本人は凄い」というスタンスでいくべきではないかと私は思っているが、先生のご意見を伺いたい。

(瀧井)

大変難しい質問であり、直接答える準備がないので答えになるかどうか分からないが、本日私が掲げた「文明」という言葉については、高等研もこれから「文明」をキーワードとして活動されていくと聞いた。ところが、職場の方で「日本文明の再構築」というシンポジウ

ムを行った際、ヨーロッパから招いた先生が驚いた様子で「civilization=『文明』という言葉は普通使わない。なぜ日本人はそんなに『文明』という言葉が好きなのか」と言われた。

その理由の一つは、日本人が自分の良いところを見出したいという欲求があるからではないかと思う。ただ、やはり日本文明を語る時に注意しなければならないのは、それが自画自賛になって、“井の中の蛙”的なものになってきた過去があるということである。そうならないためには、異文化コミュニケーションというような、どれだけ他の人を招き込んで交流をして、そこから自分たちがどのように見られているのか、自分たちは何を求められているのか、そういうことを外から学ぶことが生産的ではないかと思っている。

例えば、日本のマンガやアニメは大変に人気だが、私はアメリカの人と話す中で、日本のマンガやアニメは「世界観が凄い」と言われる。あのような自然の捉え方や人生の捉え方、世界の捉え方がとても凄いということで、そういう意味では哲学があるのだと思う。そういうものを持っている。

先ほどのご質問者のお話とも通じるかもしれないが、やはり日本は自然との共生のあり方に独特なものがあると思う。それは、善と悪の変転である。私が尊敬する手塚治虫さんのマンガでは、善だったものが悪に変わったり、悪だったものが善に変わったり、そういうことがよくある。日本は、そういう善と悪の転変を許容する社会である。それは一神教的な世界では考えられないと思う。一神教の中では、善と悪は完全に切り離されているからである。

しかし、そのように厳しく善と悪を切り離すものに疲れた人たちが、日本に癒しを求めてくるのではないか。日本の妖怪を見て、皆が癒されるのである。「なぜ、妖怪=悪があんなに可愛く描かれるのか」と言われるように、日本人は「百鬼夜行図」など悪いものを茶化してコミカルに描く伝統を持ってきた。悪が決して自分とは無縁のものではないという、そういう世界観があったのではないかと思う。

(質問者)

日本が何を発信すべきかということについて、瀧井先生は「日本は善が悪にも移り、悪が善にも移る」ということを言われたが、まさにそこが日本の良さではないかと思う。キリスト教文明では、イエス・キリストが完全に高潔なる善の塊「絶対善」として確立されてしまったために、悪=悪魔がどうしても必要になってしまった。

日本は絶対善、絶対悪というものを創らず、浄土真宗なども「善人も悪人も救済される」という考え方をする。また「ヤクザ映画」などはヤクザを美化している。そのように、悪い人も高説するところが日本の良さなので、それがキリスト教に対する対抗軸になるのではないか、キリスト教文明に対して日本がもう一つ提言し得るものではないかと思う。

ヨーロッパの学者たちと付き合っていると、彼らは自己主張するのに一生懸命で疲れてしまい、日本に招くと「日本に来るとホッとする」と言う。自我を主張し過ぎるのが欧米の悪いところである。日本はそうではなくて、自分を主張するよりも他人と一緒にいて一つのコミュニティ、まとめ、他者との付き合いというものを大事にする。それがヨーロッパ文明とは大きく違うところかと思うので、それをもっと発信できないだろうかと思っている。

Q4 岩倉使節団が持ち帰り、日本で育んだものを、日本人はなぜ発信できないのか

発信力に関する質問だが、岩倉使節団が持ち帰り、日本で育んだものを評価も発信もできないという、日本人の感性鈍磨はなぜなのか。日本人は日本を理解していないのだろうか。

Q5 排他的な宗教やイデオロギーを持たない日本は何を主眼として発信するのか

発信力に関連して、排他的な特徴を持つ宗教やイデオロギーを持たない日本は果たして何を主眼として発信していくべきなのか。そういった宗教やイデオロギーを持つ他文明は発信する上で有利だと考えるので、日本は発信型文明としては不利なのか。

(瀧井)

それが何かを一緒に探し出そうというのが本日の話の趣旨だが、例えばマンガやアニメがなぜ受け入れられるかという、今のところ日本がユニークな形で発信している世界観や自然観、人生観というものがあるからだと思う。そこで、それが何によって生み出されたのかというところを考えることが、一つの日本の発信力の根源になっていくのではないか。

また、実は今「日本型教育」という形で、文科省や経済産業省が日本の教育制度を海外に輸出しようという国家プロジェクトが進行している。その一つがエジプトで、私も見学したが、エジプトに日本式学校というものがいくつかできている。これはエジプトのシーシー大統領が日本のファンで、「日本の小学校教育を取り入れれば、エジプト国民は皆歩くコーランになる」と言って、日本の小学校のシステムを取り入れようとしたものである。それを日本政府も支援している。そういうことがエジプトに限らず、イラクや他のアフリカ等、様々な国で行われている。

具体的には、自分たちで自分たちの学び舎を掃除して綺麗にするとか、きちんと手を洗う、また道徳の授業を行っている。そういう中で、今「特活」がエジプトで一番有名な日本語となっているそうである。私は知らなかったが、「特活」＝特別活動は課外授業のようで、エジプトの日本式学校は「特活学校」と言われているようである。そういう日本の「特活」を取り入れたものを日本型教育として、日本政府は一つの戦略と位置づけて推進しているわけである。

私自身はそれを見学し、それが薄っぺらなものに終わらなければいいと思っている。日本型教育と言ってもいろいろで、日本の教育がそれほど素晴らしいと思えない部分もあり、いじめの問題や先生たちのブラックな環境など、いろいろと問題を抱えている。そういう意味で、このプロジェクトが日本型教育を正当化するアリバイづくりに使われないよう注意する必要があるが、その一方で、そういう日本に対して魅力を感じてくれている部分とどう辻褃を合わせていくことができるかという課題がある。そのためには、恐らく一方的に「日本の教育は素晴らしい」という形でセールスするのではなく、素晴らしいと感じて「日本の教育を取り入れたい」と思っているところと一緒に、日本の教育システムを使った、新しい、本当に現地の役に立てるプログラムや制度を考えていくことが必要ではないかと思う。

つまり、一方通行ではだめである。現地でも交流して、考えて、「日本型教育と言うけれども、日本にはこういう問題もある」ということもきちんと伝えて、バージョンアップした形で、現地に本当に役立てるような教育のあり方、それをまた日本にフィードバックできるようなあり方を考えることが必要ではないかと思う。

発信と言うけれども、「受容してきたから、今度は発信する」というのは安易であり、知識や技術を常に交換し合っていく関係性を築かなければ、それは真の交流にはならないように思う。

Q6 岩倉使節団は、欧米で視察すべきポイントが事前に分かっていたのか

岩倉使節団は、大隈重信が持っていたフルベッキのブリーフスケッチを持って行ったと聞いたことがある。欧米で視察すべきポイントが事前に分かっていたのではないか。

(瀧井)

岩倉使節団が成立した経緯については、いろいろなルートがあった。大隈重信がフルベッキという御雇外国人のアイデアを受けて、欧米に使節団を派遣しようと考えたということもあったし、あるいは伊藤博文がその前年にアメリカに調査に行き、もっと大掛かりに、自分だけではなくて岩倉、木戸、大久保などの人たち全員を連れて行きたいと考えたこともあった。また、幕末の頃から大久保利通も岩倉具視も、欧米に視察団として公家たちを勉強のために派遣するべきだと言っていた等、そうした様々な声が挙がっていた中で、岩倉使節団は成立したわけである。そのように、突発的に思い付きでできたものではなくて、それを求める声はふつふつと政府の中で異口同音に起こっていた。

Q7 「国制知」についてどのような見通しを持っているのか

瀧井先生が創出された「国制知」について議論されているが、どのような見通しを持っておられるのか。

(瀧井)

「国制知」は私が発明した言葉であり、簡単に言えば「国家のあり方を成り立たせるには、それに見合った知識が必要だ」ということである。つまり、どれだけ新しい知識を作り出せるかということだと思う。一時期、私が一緒に研究をさせていただいた、経営学の野中郁次郎先生が「知識創造企業」というテーゼを出されたが、「企業というのは、どれだけ新しい知識を作り出せるかが要である」と言われて、知識が創造されるプロセスをモデル化し、暗黙知、形式知などのツールも使って理論化された。その思想に倣うならば、私は、日本が新しい知識を創り出せる場にならなければならないと思っている。

そのためには、前述のように、もう一度幕藩体制を創り直すことが必要である。単に中央だけに全部集まっている現状は、中央で全部の知識や人が淀んでいるような状況ではないかと思う。もっと知識も人も情報もバラバラになって、いろいろなところから新しい知識が創発され、そして日本中にいろいろな知識がサーキットする、そういう場所として日本を創

り直さなければならないのではないかと、そのようなことを考えている次第である。

Q8 100年後も残るのはどのような文明か、1000年後も残る世界文明はあり得るのか

100年後に残っている文明はどのような要素を含んでいるのか。1000年後にも繁栄している世界文明のようなものは考えられるか。

(瀧井)

100年後、1000年後は分からないが、ある考古学者が、エジプトで新しい楔型文字の粘土板が出てきたので解読したところ「近頃の若いヤツは」と書いてあったという、笑い話のような話がある。つまり、人間は変わらないということである。そういう人間の変わらない部分を見つけて、大切にして、1000年経っても人間は人間のままで、その場、その場で懸命に文化というものを創ってきたということではないかと思う。

そういう意味では、人間はそれほど進歩するとも思えないが、決して悪くもならないのではないか。私が愛読する本の著者でもあるホイジンガというオランダの歴史家は「いつ、いかなる時代においても、人間の喜びの量と悲しみの量は一緒である」と書いている。ホイジンガはヨーロッパ中世史の専門家であり、そういう意味では、中世という時代も決して暗黒時代ではなくて、人々はその時代においてはその時代の喜び、楽しみ、笑い、悲しみというものを味わっていたと言っているわけであり、人間とはそういうものなのかと思う。

Q9 万博で「けいはんな」から新たな地上資源文明が発信できないか

今度の万博でも「けいはんな」から新たな地上資源文明などが発信できないかと思っているが、意見を伺いたい。

(瀧井)

万博に関しては、私は個人的にあまり人の多いところに行きたくないが、やるならば成功するに越したことはない。コロナ禍を経た今だからできること、「過去の万博の栄光よ、もう一度」という過去回帰的なものではなく、新しい未来志向のものを出してほしいと思う。

発行日	2024年5月31日
改定日	2024年11月1日
講演著者	瀧井 一博
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像
(国際高等研究所庭園)